

使徒言行録 2:12 人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。13 しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

2:14 すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。15 今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているのではありません。16 そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。17『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。18 わたしの僕やはしためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。19 上では、天に不思議な業を、／下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。20 主の偉大な輝かしい日が来る前に、／太陽は暗くなり、／月は血のように赤くなる。21 主の名を呼び求める者は皆、救われる。』

1 聖霊降臨の出来事

聖霊なる御神が降った出来事の続きを見えています。聖書が語る聖霊降臨の場面を繰り返し読むと、この場面が「新しい民の誕生」を語っている、という想いを強くしています。4節には「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した」とあります。聖霊が降った120名の人々が、めいめい語り出した他の国の言葉は、聖霊なるお方が、人々に語らせた言葉です。新しい民は、聖霊なる御神によって与えられる新しい言葉を語る民なのです。自分の内にある人の言葉ではない、あらかじめ人が用意した言葉でもない、その都度、その都度、聖霊なる御神から新たに与えられる、新しい言葉を語る新しい民が誕生しました。

ほどなく多くの人々が物音を聞きつけて集まってきます。しかし、彼らも又ただの人々ではありません、神が集めてくださった人々でした。「やがて必ずやって来る」と言われる救い主を渴望して、生まれ育った故郷を離れてエルサレムにもどって来た人々。彼らは不思議な光景に呆気にとられます。見るからにガリラヤの素朴な人々、外国に行ったことがあるとは思えないような質素な人々が、懐かしい自分の故郷の言葉で神の偉大な御業を物語っているのです。「いったい、何が起こったのだろうか？」驚きと戸惑うばかりです。

しかし、一部の人々は、「彼らは新しい酒に酔っているだけだ」と決めつけ、バカにします。五旬祭は、収穫感謝の祭りでだから、巡礼者の中には朝から酒を飲み酔っぱらう人もいたのでしょうか。外国人との交流が多いガリラヤ出身だから、そんな不行き届きをするに

違いない、と決めつける心があったのでしょうか。偏見や固定観念で他の人を裁いてしま
う、私達もよく犯す間違いです。

ですが、一部の人々の誤った見方が、ペトロと十一人の使徒を立ち上がらせました。14
節「**ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。**」日本語聖書では分かりに
くいのですが、先ほど紹介した4節「**人々が聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他の
国々の言葉を話し出した**」の「話し出した」と、14節のペトロが「話し始めた」は同じ言葉が
使われています。ペトロの言葉も又、聖霊によって与えられた言葉だと分かります。

この時、ペトロが十一人と共に立ち上がっている、というのも、語る言葉がその場で聖霊
によって与えられた言葉だという事を裏付けています。十二使徒たちが、この事態を想定し
て、事前に打合せ等できる筈はないからです。彼らには、いつ聖霊なる御神が降り、どのよ
うな状況となるかは全く事前には分からなかったからです。にも拘わらず、聖霊なる御神に
満たされて、霊に導かれるままにペトロと十一人は立ち上がり、ペトロが代表して集まってき
た会衆に語り始めます。新しい民の「最初の説教」と言われています。

そして、又、120人の人々がよその国の言葉を語り出したことも、会衆の前に立ち上がった
のが、十二人の使徒であったことも、彼ら新しい民が、「新しい神の民」であるという事を指
し示しています。言うまでもなく、「十二」という数字は、「神の民イスラエルの十二部族」を指
し示しているからです。

2 既に始まっている終わりの時

ペトロは、いえ、ペトロを通して聖霊なる御神は、「今、皆さんの目の前で繰り広げられて
いる光景は、祭り気分に分かれた人々の姿ではない。朝の九時、祈りの時間です。酒を飲む
筈はいません。」と先ず弁明されます。

そして、次に「これは、預言者ヨエルを通して言われていた事が起こったのです」と語ら
れ、ヨエル書の第三章の一節から五節を引用されます。「17『**神は言われる。終わりの時
に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は
幻を見、老人は夢を見る。18 わたしの僕やはしたためにも、／そのときには、わたしの霊を注
ぐ。すると、彼らは預言する。』**」

ここで聖霊なる御神はペトロを通して、「『今こそ、終わりの時』が始まったのです」と宣言さ
れ、「これらの120人の人々は、終わりの時に注がれるという神の霊を注がれ、預言していま
す」とヨエルの預言が実現したと、その根拠を示されているのです。

ですが、ヨエル書をそのままの引用したのか、というと、そうではありません。少しだけ追加
された部分があります。18節、ヨエル書には、「僕やはしたためにも」とあるところが、「わたし
の僕やはしたためにも」と「わたしの」を追加しています。つまり、「神の僕やはしたために霊を注
ぎ、彼らは預言する」と語っているのです。それまでは、「身分の低い男奴隷、女奴隷にも私
の霊を注ぐ。」と読まれ、「神は人を差別される事なく、終わりの時には、奴隷にさえも霊を注
ぐ、と約束くださる」と解釈されていました。しかし、そこに「わたしの」と追加する事で、「神の

僕や神のはしためにも霊を注ぐ」と新たな解釈を示したのです。つまり、ペトロを通して、聖霊なる御神は「終わりの時に、神は、ご自身に従う者に霊を注ぎ、新しい民をつくり出してください、とヨエルを通じて約束された。そのことを、今、皆さんは目撃しているのです」と語っています。

「終わりの時」は既に始まっています。私達が始めたものではありません。独り子なる御神が人となり、人間の全ての罪を贖って十字架に架かってくださった、そして三日目に甦られ、今は神の右の座についておられる、その十日後に聖霊なる御神が降ってくださり、そのみ力を持って支配する民をこの地上につくり出してくださいだったからです。聖霊降臨の出来事は、神の新しい民の誕生によって終わりの時の始まりを告げる出来事でした。

ですが、終わりの時はまだ完了してはいません。「神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。」と預言されているように、神の霊は、全ての人に注がれてはいないからです。まだ、20節にある「主の偉大な輝かしい日」、神のご支配が完全に現れる日にはなっていません。だから、今現在もまだ「終わりの時」なのです。

この終わりの時、十字架と復活の主イエスを「我が神、我がキリスト」と告白する者達に、聖霊なる御神が降り、聖霊なる御神によって語るべき新しい言葉を与えられ、新しい生き方をする民へと造り変えられ、日々、成長していく、それが新しい民、新しい言葉を語り、主イエスに従う新しい生き方を実践する民です。

しかし、この終わりの時は、下には「血と火と立ち上る煙」という徴が与えられる時でもあります。新しい民も又、「神はどこにおられるのか」という問いかけから無縁ではられません。しかし、「神はどこにおられるのか、神のみ旨はどこにあるのか」という問いかけを胸に聖書を読む者に対し、聖霊なる御神は、新しい解釈を示し、その者達の問いかけに答えを与え、イエス・キリストを指し示す新しい導きの言葉が与えられ続けるのです。それが、終わりの時を生きつつも「主の名を呼び求める者は救われる」とヨエルが預言している事ではないでしょうか。主の名を呼び求める新しい民は、イエス・キリストの愛に支えられ、イエス・キリストを通して神を愛し、仲間を愛し、世界を愛する道へと招かれ続けるのです。

3 新しい民の生き方

そんな新しい民を代表して、聖霊なる御神に促されて語り始めたペトロは、集まって来た人々に呼び掛けます。この部分を読むと、ペトロは、会衆の様子をよく観て、丁寧に心を込めて呼びかけていることがよく分かります。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。」「愛する」という事は、相手をよく見ることだ、という話を聞きました。その通りだと思います。真実に愛すると言う事は、先ず、相手を知ろうとすることです。何故なら、主イエスがそうされていたからです。主イエスは、地上のご生涯で、実に多くの人々を癒されました。しかし、「相手はいつでもいい、相手を知らずに癒す」という事は決してなさいませんでした。皆さんは、十二年間出血が止まらなかった女性の癒しの話は覚えておいででしょう。十二年間出血が止ま

らず、「穢れた者」というレッテルを張られ差別され、病気を治す為に医者に全財産をつぎ込んで治してもらえなかった女性の話です。彼女が、「主イエスの衣の裾にさえ触れれば癒して頂けるのではないか」と主の衣に触って癒された時、主イエスの周りは、押し寄せる大群衆でおしくらまんじゅう状態、誰が主の衣の裾に触れたかなど、分かりようもありませんでした。しかし、自分から力が出て行ったことを感じた主イエスは、自分の衣の裾に触れたのは誰で、誰を癒したのか、知ろうとなさいました。それは、その相手を愛したい、と考えたからではないでしょうか。決してあい対する人を蔑ろにはしないお方、主イエスでした。

新しい民は、この主イエス・キリストに倣い、自分達の以外の「よその人々」を愛そうとする民です。しかし、それは聖霊なる御神の御力でなければ、到底できることではありません。ペトロが親しく語りかけているエルサレムの町は、ほんの二か月足らず前に、彼らの愛する主イエスを磔にした敵が多く住む町であり、彼らを深く悲しませ怖がらせ主を裏切らせた人々の町です。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。」ペトロの人間的な想いからでは到底発することのできない呼びかけであったと思います。今日の聖書に描かれるペトロの説教、それは新しく誕生した民の産声です。

4 主が起こしてくださる奇蹟

それから2000年が経ちました。2/24 から始まったロシアのウクライナ侵攻について、ため息をつく方も多いと思います。ロシアは、ウクライナの原発を次々と占領し、ヨーロッパ諸国に脅しをかけています。激しく武力抵抗するウクライナ、日々死傷者が増えて行くばかりです。更に、キリスト者である私達が特に痛ましく思うのは、両国ともキリスト者が多くいる国、にも拘らずロシア正教もウクライナ正教も両国の指導者の心を停戦へと導く事ができていません。2000年前の聖霊降臨の出来事で産まれた新しい民は、一体どうしたのでしょうか。語るべき言葉を失ってしまったのでしょうか。

呻きつついた時、SNS で以下のような祈りの詩と出会いました。アン・ウィームズ(Ann Weems)さんというキリスト者の『もはや平和を祈らない』という詩です。

「戦争の縁に片足はもう入っている。
もはや平和を祈らない、奇蹟を祈るのだ。
石の心が 優しい心へと変わり
悪意が慈しみの心へと変わり
配備されているすべての兵士が
危険な場所から救い出される奇蹟に
全世界が 驚いて膝をつくことを。
すべて<神が語られること>が 骨をとって立ち上がり
不信仰の纏(まとい)を取り除かれ
力強い真理の中を再び歩み始めることを。」

全世界がともに座して パンと葡萄酒を分かち合うことを。
希望などないと言う人もいる。

けれども、わたしたちの信仰が躓いたとしても、
決して諦めることない聖なる愚か者たちに、
わたしはいつも拍手を送ってきた。

わたしたちは神に愛されているのだ、
わたしたちは真に互いに愛し合うことができるのだ、と。

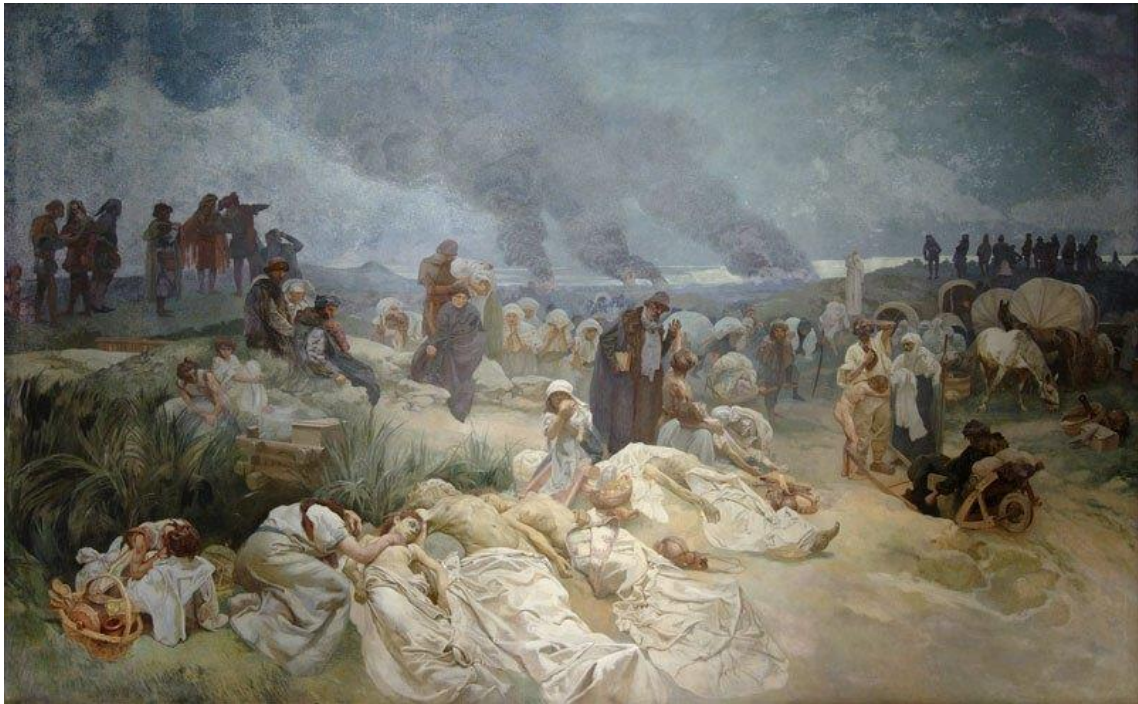
もはや平和を祈らない
奇跡を祈るのだ。」

(作:Ann Weems 氏

訳:西原廉太氏 (<https://www.facebook.com/renta.nishihara>))

私は、この詩を口ずさみ、聖書の言葉を思い返し、気づかされました。ペトロ達120人は、心を一つに何を祈っていたのか？奇蹟を祈っているのです。聖霊なる御神が降るとは、まさに神のみ手の働き、奇蹟だから。そして、R.ボーレン先生は、言いました。「聖霊なるみ神の働くところ、心と口は祈ります。」と。私たちも、又、新しい民の原点に戻り、聖霊なる御神に導かれて、奇蹟を祈り続けたい、と願います。血と火と煙の立ち上る中であっても、平安をもたらしてくださる神の奇蹟を祈り続けたいと思います。新しい民とは、いつも新しい奇蹟を神に祈る民。この奇蹟は、人の目にはささやかな事にしか映らず、報道機関が大々的に報道するものではないかもしれませんが、しかし、主イエス・キリストが聖霊なる御神を通じて、一人一人の心に話しかける奇蹟は、現に今も起こっている、と信じます。

終わりの時を生きるキリスト教会の歴史は、そんな奇蹟によって切り拓かれた歴史だからです。その一つ、一枚の絵に描かれている出来事をご紹介します。5年前、「ミュシャ」というチェコの画家の大規模な展覧会で出会った絵です。



私たちは「宗教改革」というとマルティン・ルターから始まった、と考えるかもしれませんが。しかし、ルターより100年前、今から600年ほど前に、チェコの司祭ヤン・フスが、当時腐敗し切っていたローマ・カトリックに対して改革を求めて立ち上がりました。フス自身は火あぶりで殺され、チェコやポーランド一帯はフス派と反フス派が争う内戦状態に陥ります。そんなチェコにあったヴオドニャヌイという町は、フス派が支配していました。しかし、戦争の混乱の中、味方である筈のフス派指導者の誤解により、町は焼き討ちにあい、市民は街を逃れて郊外の丘に逃げ、死者を葬ります。その時の様子を描いたのがこの絵です。絵の左下の隅に描かれた脇にバスケットと籠を置いて泣く娘は処女喪失を表現するそうです。死者と共に町で何が行われていたか考えると胸が抉られる想いです。「背景に立ち上る煙が惨劇の凄まじさを伝え、陽光が前景に横たわる犠牲者を照らし出しています。市民たちは、反フス派の傭兵に通報し町を焼き払ったフス派指導者に報復したいと強く願いました。が、民衆の司祭であったペトル・ヘルチツキーは暴力と流血を拒み、怒りに燃える群衆に復讐心にそそのかされないように、と懇願します。カンヴァスの中央に描かれたヘルチツキーは、脅かそうと突き出された男のこぶしを受けとめ、聖書から慰めの言葉を語りかけます。」(ミュシャ展図録より)。ヘルチツキーの願いを人々は受け入れ、やがてヴオドニャヌイの町は、社会的格差を解消してフス派も反フス派も共に暮らす街として再建されたそうです。ヘルチツキーが右手に持っている本が聖書です。彼は、怒りの虜となっている人々に、聖書のみ言葉からキリスト・イエスを示し続けたのです。ヘルチツキーが伝えたキリスト・イエスが、終わりの時の試練の中、新しい民として生きる勇気を人々に与えられました。これは先ほどの詩で祈り求められ

た奇蹟です。この奇蹟が彼らの将来を切り拓きました。作者のミュシャは、この絵画を第一次世界大戦の最中に制作したそうです。吹き荒れる暴力の中、ミシャも又、奇蹟の起こることを祈り続けた一人だったでしょう。

新しい民である我々は、世界が試練の時、この地上に「血と火と立ちこめる煙」であっても、ただひたすらに主イエス・キリストの名を呼び求め、奇蹟を祈り願い、聖霊の御力によってイエス・キリストを示し続ける「聖なる愚か者」でありたいと願います。このようにして、如何なる時にも聖霊なる御神の力によって、永遠の命へと続く道を歩ませてくださる父なる御神に感謝せずにはられません。